

JIAM20周年と A2コースの思い出

滋賀県大津市 会計管理者 中川 弘

20年前のAコースの研修とは

平成5年9月6日(月)午後、全国各地から91名の自治体職員が次々とJIAMの中に吸い込まれていった。

翌日の開講式を前に、受付を済ませた研修生たちは、荷ほどきをすべく各自の個室へと急いだ。

期待と不安が錯綜するなか、部屋のドアを開けた瞬間、「あー狭い」と嘆息を漏らし、この部屋で3ヶ月を過ごすのかと覚悟する。

現在、JIAMの研修メニューには、3ヶ月間の研修コースが見当たらない。しかし、「Aコース」と名付けられた3ヶ月コースこそが、平成5年設立当初のJIAMが誇る国際研修コースだった。

そして、その2期目がA2コースであり、研修生91名という人数はJIAM史上最多といわれている。

出身地は、北が北海道の北見市から南は鹿児島市までと、実に幅広い。男性78名、女性13名の構成で、平均年齢33歳という若手職員中心のコースである。やはり語学講義主体の長期研修に耐えるには、若い職員の方が良いのかもしれない。

7日の開講式とオリエンテーションを終えた後、研修生を待ち受けていたのは、英語のペーパーテストと外国人語学教員による面接試験であった。試験結果に基づき、A、C、D、E、G、K、L、M、Oの9クラスに振り分けられ、翌日から基本的に午前中は2時限(1時限は70分)のクラス別の語学研修と、午後は3時限の各種全体研修がスタートした。

今でこそJIAMの施設内の表示は英語と日本語で併記されているが、当時は至るところ全て英語表示で、自室内のテレビも英語放送オンリーの受信設定であった。

このような厳しい環境(?)のなか、4階の談話室が研修生の憩いの場、通称“大阪ラウンジ”として活況を呈していた。毎晩、近畿圏自治体職員が招集をかけ、麦や米のジュースで喉を潤しながら様々な情報交換を図り、自治体が進めるべき国際交流のあり方について熱く語り合い、また、あるときは週末の行き先の検討をするのだ。

ただ驚くべきことに、毎日、午前2時頃にラウンジを閉じて、翌朝9時30分からの語学クラスでは、誰もが宿題をしっかりと仕上げてきた。つまり、自室に戻れば睡眠時間を削って勉強に励んでいた。

この大阪ラウンジの中で、大阪府貝塚市の兒玉さん(現在、健康福祉部長)から「国内交流ができない奴に、国際交流などできる筈がない。」との名言が飛び出した。正に至言である。後日、この言葉によって、私はA2コース同窓会の会長を引き受ける決心がついた。

海外研修前の外泊

平成5年9月7日から始まった研修は、途中、12日間の海外研修をはさみ12月3日(月)に終了するのだが、11月8日から19日までがアメリカへの派遣研修であった。

海外研修を控えた11月4日の夜、琵琶湖ホテルにおいてJIAM主催の壮行会が盛大に開催された。

現在の琵琶湖ホテルは平成10年に移転新築されたモダンなホテルだが、20年前の琵琶湖ホテルは外国人観光客誘致のため昭和9年に建設されたもので、かつてジョン・ウェインやヘレン・ケラーが宿泊した伝統的なホテルであった。

8日からのアメリカ研修では、ハイアットリージェンシーなど一流ホテルに宿泊する。研修生の顔



ぶれを見ると、若い職員が多い。そこで、私は大阪ラウンジで事前に一つの計画を提案し、皆さんから賛同を得たので、壮行会の日に実行することにした。

その計画とは、海外研修に旅立つ前に、若い研修生がアメリカンスタイルのシティーホテルで宿泊を体験するというもの。壮行会の夜は、研修生全員が正装をすることになっており、この機会を利用すれば気おくれすることなく堂々とシティーホテルが利用できる。幸いなことに、大津市には38階建の大津プリンスホテルが琵琶湖畔で平成元年から創業しており、同ホテルの担当者と交渉して割安料金での宿泊が可能となった。

壮行会終了後、大半の研修生はJIAMへ帰る琵琶湖ホテルのバスに乗車するのだが、私たち大阪ラウンジ組は大津プリンスホテルの送迎バスへと乗り込んでいく。この日の外泊については、以前からJIAMの関係課と相談のうえ事前に許可を得ており、無事に大津プリンスホテルで約30名が宿泊できた。37階の朝食会場からは、朝日で光る琵琶湖の水面が眩しく映り、皆でアメリカ研修の成功を誓いあったことが懐かしい。



ホームステイの思い出

11月8日からの海外研修では、ワシントンD.C.での全体研修と、9都市別の小グループ研修があるため、事前に10名ごと（1都市だけ11名）の小グループ編成が行われた。編成方法は、JIAMで選定済の9都市ごとに研修生の希望を募り、希望者多数の都市については抽選で決定することになっていた。

私の希望はアリゾナ州フェニックス市で、研修生の中で最も人気の高かった都市である。抽選の結果は、何とか幸運に恵まれた。

11月11日（木）、ワシントンD.C.から9都市の小グループに分かれての研修が始まった。

ホームステイは、13日（土）朝から15日（月）午前までの2泊3日である。12日の夜、夕食後にホテルへ戻ってくると、私の部屋にホストファミリーから手紙が届いていた。明日、天気の良いれば、自家用飛行機で空からの景色を楽しもうという内容だ。13日の朝、早速、私はホストファミリー宅に電話で手紙のお礼を伝えた。

しかし、残念なことに、その日の天候は小雨混じりの強風で、フライトには向かなかった。

ホテルでホストファミリーの到着を待っていると、11時すぎに50歳前後の白人夫妻が迎えにきてくれた。ご主人は総合病院勤務の産婦人科医、奥様はボランティア活動に熱心な専業主婦である。2人揃ってアメリカ屈指の名門大学スタンフォードの卒業生だ。ホームステイ先は高級住宅街の中にあり、も



本科Aコース第2期 平成5年9月7日～12月3日 於 全国市町村国際文化研修所

ちろん家には自宅専用プールと別棟のゲストハウスが備わっていた。ご夫妻には娘が2人いるのだが、いずれも実家を離れて大学生活をおくっているため、私は娘さんの部屋を使うことになった。

部屋のドアを開けると、大きなベッドの上にピンクでハート型の枕が大小5つ並べてある。まさか女子大生の部屋を使うなど、こちらに来るまでは思ってもみなかった。

13日の夜は夫妻の友人宅でパーティがあり、私も同席して2時間程度のお喋りを楽しんだ。14名の出席者とそれぞれに挨拶を交わし、日本の教育問題やアメリカの犯罪問題など、いろいろな話題で互いの意見を述べあうことができ、大変有意義な時間を過ごせた。

パーティ終了後、私たち3人はフレンチレストランで食事することにしたが、先ほどのパーティの出席者でアイゼンハワー大統領の甥ご夫妻や、ゴールドウォーター上院議員（1964年の共和党の大統領指名候補者）の子息、さらには同上院議員の元秘書といった著名人が食事をしてきたことから、隣のテーブルにつくことにし、パーティで深く追求しなかった政治の話聞くことになった。皆さん相当酒量が進んでいたため、現政権に対する不平不満が次々と飛び出てくるのが面白く、アメリカ人の政治に対する本音に触れることができた。

兎にも角にも、私のアメリカでのホームステイは、高級住宅の華やかな部屋で眠りにつき、アメリカ政治を動かしていた人たちの話を直に聴いて過ごす、夢見心地の3日間であった。

年間降水日数が20日程度のフェニックスで、あいにくの荒天により自家用飛行機の観光をキャンセルしたことだけが、ただ一つホームステイでの心残りだ。最後の朝、13日の雨は私にもう一度フェニックスに来いという意味の雨だねと、ホストファミリーに伝えて別れた。

私の海外渡航歴とエピソード



JIAMでの研修後、海外旅行に行く仲間が増えたように思い、この原稿を書くに際し、改めて私の渡航歴を確認してみた。

37年前の大学生のとき、初の海外旅行をしたことに始まり、今年の1月までに通算34回（アジア20回、欧州8回、米国5回、豪州1回）を数える。

この中には、もちろん新婚旅行（1回だけ）も含んでいるが、3分の1にあたる11回（73日）が公務出張だ。

たぶん一般の公務員にしては海外出張が多いかもしれない。しかし、例えば3泊5日のアメリカの姉妹都市訪問という強行スケジュールもあれば、11日間の全日程が議員のお世話係といった密度の濃い旅行も入っている。

しかも、ヨーロッパであろうがアメリカであろうが、帰国した翌日から通常どおり出勤し、日常業務をこなさなければならなかった。

その中でも忘れられないのが、平成13年9月のアメリカの姉妹都市訪問旅行から戻ったときのことである。ご承知のように、平成13年は西暦の2001年、その年の9月11日といえばアメリカ同時多発テロの発生日であり、事件が起きた場所の1つはニューヨークの世界貿易センタービルであった。

このときは、市長が団長で市会議長が副団長を務める、総勢58名の大型訪問団が結成され、姉妹都市での公式行事終了後にはニューヨーク方面の視察が予定されていた。

訪問時期が9月であることから、市長と議長は9月定例市議会の合間を縫って出張することになり、いつものように3泊5日の旅程で姉妹都市だけを訪問し帰国したのだが、残りの52名の団員（市民49名、同行の市職員3名）は予定どおりニューヨークへと向かった。そして、宿泊先が世界貿易センタービル近くのホテルであった。

当時、まだ議会事務局職員の私は、市長や議長とともに9月10日の夕刻到着便で関西国際空港に戻っ

てきた。関空から約1時間半かけて大津に着くと、すでに琵琶湖の夜景が見える時刻だ。翌日の午前10時から9月定例会の本会議の質問が始まる。今夜は久しぶりに湯船につかって、明日の本会議に備えようと思っていた矢先に、あの仰天ニュースが飛び込んできた。

何ということだ。よりによって世界貿易センタービルとは。ひとり言を呟きながら市役所へ向かった。

秘書課では関係部局職員が集まり、旅行社を通じて52名の安否確認に努めていたのだが、当然ながらアメリカ国内への連絡自体が困難な状況にあり、必要とする情報の入手に手間取るばかりであった。急遽、市長と議長も市役所に駆けつけ、固唾を呑んで団員の安否情報を待つ。焦る気持ちを抑えながら、旅行社からの電話を待っていると、たしか午前3時すぎであったと思うが、ニューヨークに同行した職員から秘書課に国際電話がかかってきた。全員無事の知らせを受けた瞬間、市役所内は安堵の空気に包まれた。直ちに、その場にいた職員が手分けして、団員のご家族に朗報を伝える。

そして、アメリカから帰国して徹夜で迎えた翌朝の市議会本会議には、疲労の色を隠せない市長と議長、そして私の顔があった。



A2コースの仲間たち

JIAM設立20周年は、A2コース研修生にとっても特別の意味がある。この20年間に、阪神淡路と東日本の2大震災を経験し、我々一人ひとりが公務員として様々な人生模様を織り込んできた。すでに退職した仲間がおり、また、山形県新庄市長や愛知県豊田市議会議員のように公務員（一般職）以外の活躍の場へ転身された方もいる。

しかし、20年前にJIAMで共に3ヶ月を過ごした経験と、その後の91名の全国的ネットワークは、仕事だけでなくプライベートでも大いに役立ってきた。A2コース同窓会は、阪神淡路大震災や東日本大震災の年にも開催し、仲間の結束力を高めてきたのだ。その原動力になっているのが、近畿、愛知、関東の3ブロックの仲間たちで、毎年数回のブロック会議を開催して同窓会の運営を支えている。特に彦根市の村田さん（現在、広報課長）が平成7年に創刊した通信紙によって、今日まで20年間、この同窓会が継続してきたと確信する。

そして、本年8月24日に20周年記念同窓会を琵琶湖ホテルで開催し、札幌や鹿児島からの参加を含め、全国から38名の仲間が大津に結集した。当日はJIAMの施設見学があり、同窓会初参加の人もいて大いに盛り上がった。来年は関東ブロックでの開催が決定し、次の年には復興著しい仙台市で開催することも検討中だ。これで21周年からも引き続き仲間の絆を深めていける。会長として感激に堪えない次第です。皆さん、本当にありがとうございます。



平成25年8月24日（土）JIAM見学時は29名